『私の航跡　メディアと教育のあいだ』
一藝社

宇佐美 昇三(2025)

紹介者名　湯舟 英一
東洋大学

本書は、長年 LET で活躍され現在もシニア会員でおられる宇佐美昇三先生が 2025 年 3 月に出版された 233 ページからなる自叙伝を兼ねた著作である。ぜひ今の LET 会員や全国の英語教員、とりわけメディアを利用した外国語教育に興味のある方々と共有したい思いから、この場をお借りしてその概要をお伝えしたい。

宇佐美先生は、NHK で 25 年間、語学番組ディレクターなどを担当された後、上越教育大学、駒沢女子大学で教授を歴任され、退職後も日本大学芸術学部非常勤講師を始め、ニューヨーク大学など世界の複数の大学で客員教授を務められ、国内外で映像メディアと言語教育の発展に多大な貢献を残された。本著書はその半世紀以上に及ぶ放送と教育現場でのご経験を時系列で語られる傍ら、ご自身やそこで出会った様々な人物、日本の語学放送番組の黎明期を支えた諸先生方のエピソードや成功例、失敗談、教訓などから、今の我々が学ぶことも非常に多い。そのいくつかをご紹介したい。

先ず、1960 年代に発達した「視聴覚教育」は 1980 年代には「メディアによる教育」として発展してきた。60 年代は語学放送が大きく発展した時代でもある。『カムカムエブリボディ』から『基礎英語』、次いで宇佐美先生がディレクターを担当された『続基礎英語』や『英語会話（中級)』、同（初級）など話題のラジオ、テレビ番組が誕生した。そこで生まれたアイデアが英語の「発想別分類表」であった。大項目は主観と客観で大別され、さらに小項目として「決まりきった表現」「簡単な表現」「文頭表現」に分けられ、今の指導要領でいう「言葉の働き」すなわち「許可」や「確認」などの言語機能別にテキストが編集された。宇佐美先生曰く、「米国人の考え方（発想）を知れば英語表現の意味を理解しやすいだろう。また意思の疎通もうまくいくはずだ。」　それまで多くの語学番組制作や講師陣らとの交流があった宇佐美先生には、それは当然の流れだったのかもしれない。この試みは 1969 年の LLA（LET の前身）の全国大会で発表された。世の中は当時、大阪万博、ベトナム反戦運動、大学紛争、アポロ 11 号の時代。今でこそ、発想別や機能別シラバスは普通のことであるが、ミシガンメソッド全盛であった当時としては大きなインパクトがあったに違いない。実際、ウィルキンスが Notional Functional Syllabus を欧州評議会で発表するのはその 7

年後の 1976 年であった。宇佐美先生によれば、「発想別」は LLA で発表された当時は大きな反響は得られなかったとのこと。しかし、ほどなくして、日本でも語用論研究や概念機能シラバスとコミュニカティブ・アプローチが言語教育の一つの主流となって行ったのは周知のとおりである。

その後も宇佐美先生は、LLA での学会活動を中心に、LET 元会長の大八木廣人先生らと共同でヒヤリング教材やビデオ教材開発に従事された。宇佐美先生は当時の仕事を振りかえり、「教育とはゲバ棒を使わない静かな革命だと思った。一方、教育は権力の意志に沿って国民に圧力をかけるのだ。」と書かれている。一方で、当時全国の学校に設置された LL に関して、「技術者や録音教材を編集・管理する助手が配置されている学校は稀だった。教師は機器の操作の面倒くささや教材準備、後片付けが重荷になった。後方支援を欠いた LL 教室は使われなくなっていった。」と宇佐美先生は振りかえる。どんな優れた教育メディアも後方支援を得られなければ効力を保てないという教訓である。今でこそ AI やコンピュータで視聴覚の編集や授業準備もだいぶ楽になったが、いまだ多くの学校でメディアサポートセンターが存続する一方で、人件費を賄えない学校の教育現場を想像すると寒々しさを感じる。

私はこれまで宇佐美先生と特別懇意だったわけではないが、文書の書き方、とりわけ、曖昧な表現や冗長な表現を何度か注意されたことがある。本書では、宇佐美先生の苦手な言葉として、「切り口」と「位置づけ」を例に紹介している。先生は NHK 在職時に「番組の切り口」という表現に多く触れたのだが、それは結局のところ何を指しているか曖昧で要点を得ていないと指摘する。先生によれば、「切り口」とは時代小説で言う「斬った後の断面の鮮やかさ」のことで、「様々な番組材料があるときに、何かを捨てる。その捨てた結果、冴えた番組が生まれる。その冴え具合を褒めたのが私なりの「いい切り口の番組」なのだ。」

もう一つの「位置づけ」について宇佐美先生は、「番組は品物のように棚に並んでいない。想起心象によって過去や未来に繋がって働くはずだ。そういう繋がりを見ずに固定していいのだろうかと私は苦々しく感じた。」　これら宇佐美先生が感じた違和感はそのまま英語教育の現場にも通じる。取捨選択が冴えた授業はいい切り口の授業になり、また同じ語彙表現でも異なる場面や発想で使われるため、一つの文法項目や一つの場面・発想に位置付けるべきではないことを示唆しているように思える。

本書でもう一つご紹介したいのが「ミッキーさんの十の戒め」である。「ウォルト・ディズニーは、ディズニーランド構築にあたって抱いた彼の理念を後継者に持ち続けて欲しかった。そこで「十の戒め」を残した。」とあり、それらは以下の 10 項目である。１）お客を知れ、２）お客の靴を履け、３）人の動きを想像せよ、４）目玉を設けろ、５）コトバよりも映像で説明、６）過剰を避け、転換せよ、７）一場に一話、８）矛盾を避けよ、９）一粒の手当は１トンのご馳走に勝る、10）続けろ、やめるな（以上、宇佐美先生訳）。「お客を知れ」「お客の靴を履け」とはすなわち「生徒を知れ、生徒の立場になって考えろ」というこ

とでもある。すべてが教育現場に当てはまり、宇佐美先生が本著で紹介された意図も合点がいく。

最後に、宇佐美先生が NHK 時代からずっと考察されているテーマに「レッセージ」がある。これは先生ご本人の造語でもある。「コトバとは「品物の受け渡し」のように、送り手から受け手に移動するのではなく、受け手は、その言葉を自分なりに解釈する。送り手のコトバの意味と受け手の解釈が一致してはじめて「通じた」ことになるのだ。これをモデル化したのが「レッセージ・モデル」だ。」　長年、視聴覚メディアや番組制作のようなシビアな仕事をされてきた宇佐美先生だからこそ、そのことを強く感じられたのかもしれない。放送番組やエンタメは面白くなければ、視聴率が悪ければ打ち切り、本物でなければ生き残れない。そのような業界での経験から言語教育を「冴えた切り口」で表現されたモデルと言えよう。そして受け手が送り手のメッセージを再現するために「映像」「番組」「放送」、そして「教育メディア」が重要な役割を持つということを宇佐美先生は我々に伝えたいのだと感じた。

以上が『私の航跡』を通して私が受け取ったレッセージを言語化したものである。先生の送られたメッセージとは大分ずれているかもしれないが、それは経験不足ゆえお許し頂きたい。しかし、宇佐美先生によれば、受け取ったレッセージを言語化し、さらに意思疎通を続けることで、両者のずれは埋まるのである。

ここでご紹介した内容は本書のほんの一部であり、上記以外にも、先生の幼少期や学生時代の経験や、宇佐美先生のもう一つのライフワークである、笠戸丸や蟹工船など歴史上の「船」の考察、オッペンハイマーへの直接取材や先の大戦での核使用に対する彼らの問題意識など、その内容は多岐にわたる。紙面の都合で全てをご紹介できないのが残念であるが、ぜひ多くの LET の会員の皆さんに本書を手に取って頂きたい。きっと、「メディアと教育のあいだ」にある・あった様々な取り組みの成功と失敗の数々、メディアと教育の関係性、普遍性、そして AI 時代の教育現場に立つ我々にとっての今日的課題が見えてくるはずである。